

作家、郷土史家

大牧 富士夫さん

ひるみ



徳山村の歴史、後世に

徳山村から離村されて29年、徳山ダムの試験たん水から7年半近くの歳月が流れました。今あらためて感じていることはありますか。

年をとるとともに村のことが懐かしくなってきました。集団移転地は五つで、移転した世帯は揖斐郡揖斐川町が一番多い。本巣郡北方町は最も少ない34世帯ほどだったが、今はほくより年上の人がほとんどでなくなりました。徳山村には八つの集落があり、ほくが住んでいたのは下開田地区。北方町には下開田地区の人が多く移り住みましたが、集団移転は集落ごとに行われたわけではないので、新たな移転先で苦労した人は多いと思います。名字でこの集落の出身の人かは難しい推測ですが、顔をみれば誰かとも分かります。同世代の徳山村出身者と会うと徳山弁ですが、世代が違うと話題も違う。村のことを話す相手がいなくなると感じています。

書斎のパソコンの画面に、集団移転前の下開田地区を写した航空写真を表示し、毎日写真を見て懐かしんでいます。写真には、生家や水浴びをした川が写っており、魚を捕ったこと、「みぞー、みぞー」と近所に声を掛けて川へ水浴びに行くことを知らせる習慣、祖父に泳ぎを教えてもらったことなどを思い出します。太平洋戦争が終わった時は帰る村がありました。村はもうなくなっていました。――「徳山村史」や「郷土資料 揖斐郡 徳山村方言」などの編集執筆に携わるなどしてこられました。どんなきっかけで

おおまき・ふじお 1928年、旧徳山村現揖斐郡揖斐川町生まれ。徳山国民学校高等科修了後、44年に村松陸軍少年通信兵学校(新潟県)に入校。翌年、終戦を迎える。戦後は岐阜大学卒業後、業界紙記者などを経て、63年から85年まで旧徳山小、中学校に勤務し、同年に離村。在職中は「徳山村史」の編集執筆に携わったほか、岐阜大学教育学部の編集発行で「郷土資料 揖斐郡 徳山村方言」を執筆、徳山村の歴史や方言、習俗、暮らしに関する著書は「たれか故郷をよめる」「徳山村離村記」ほくの家には、むさびが棲んでいた。徳山村の記録など。プロレタリア文学に造詣が深く、作家中野重治に関する評論や妹中野鈴子に関する著書もある。本巣郡北方町在住。

始められたのですか。

村史の編集執筆に携わったのは、徳山村の小学校教諭時代に、太田三郎さん、眞歴史資料保存協会会長、不破郡垂井町に出会ったのがきっかけです。その縁で地や歴史に興味を持つようになり、1973年には一民俗資料緊急調査報告書を書き始めました。また、69年に岐阜大学教育学部の編集発行で、方言辞典「郷土資料 揖斐郡 徳山村方言」をまとめたことが思い深い。これは母親が話す徳山村の方言をノートに書きためてきたもので、病気の母親に親孝行したい思いでまとめました。母の言葉を残せて良かったと思います。

父親は炭焼きをしていましたが、ほくが教諭として村に帰ったころは電気、ガスが普及して仕事がない状態。病気を患っていたこともあって、ダムの完成を心待ちにしていました。古里の行く先を見届けたいという思いです。

――業界紙記者を経て、故郷の徳山村の小、中学校で教へんをとられる一方、「岐阜文学」「幻野」などで文学活動を続けられてきましたね。

プロレタリア文学運動に参加し、多くの作品を発表した中野重治が戦中につづった詩の評論などを岐阜文学に書いてきました。重治の妹の鈴子の書いた時にも関心があり、鈴子と鐘の詩人金龍清との交流などを調べる中で評論家作家の黒川創さんと知り合いました。黒川さんのおかげで、京都市の出版社編集グループ「SURF」の出版で、2006年2月から同社のホームページに「徳山村の自然や文化を題材にしたコラム」を寄稿し、それらをまとめた徳山村に関する3部作が出版されるなど、一連のつながりの中で徳山村のことを書くことができました。

ダムの問題、心の「ひるみ」書きたい



パソコンに表示した水没前の旧徳山村を写した航空写真を見て思い出を語る大牧富士夫氏―本巣郡北方町芝原中町

現在は、風媒社(名古屋)が出版する同人誌「遊民」に中野重治や金龍清などをテーマにした評論を寄稿しています。村のことを書くのを再開したいと思っています。ここ数年、村のことを書いていませんでしたが、今書いておかないと徳山村が忘れられるという思いが出てきました。

――徳山村に関して書き残したことがまだあるということですが、今後は村のどんなことを書いていくお考えですか。小学校教諭として徳山村に帰った時から付けている日記を基に思い返して、心の中にある「ひるみ」を書いていきたいと思っています。ほくは、ダムの問題に直面してもそれを突き詰めて、粘って考えず、時の流れに従って集団移転して問題から逃したなどの思いがあります。非常にあきらめない気持ちです。多くの人が古里に帰ることができなくなった福島第1原発事故などについても思うことはあるのですが、「お前はどなただ」と自問し、正面切って批判・反対することにひるんでしまう。自分の中にあるそのひるみを書きたいと思っています。

福島第1原発の事故によって、帰る故郷をなくした人がいます。沖縄県名護市の人たちは、自分たちが生活するために国、行政の方針を認めないと生きていけないというシレンマを抱えていると思われ、徳山村も国策に従わざるを得ず移転を余儀なくされ、古里は湖底に沈みました。

徳山ダム建設は無駄だったのではないかと思っていますが、村を移転したほくがダムのことをどう書いたら良いのか、気持ちの整理ができていません。ただ、徳山ダムがどうなっているか、どんな問題を抱えているかについては村民として考えていかなければならないでしょう。

聞き手 山本 耕
構成 瀬見井芳信
写真 真野尻信一郎

この企画は月1回掲載します。

お会いして

「徳山から逃げ出した旧村民の一人として……」「福島原発事故について発言しなければと思うが、じゃあおまえはどうだったんだ、と自分に返ってきてしまう」。大牧さんの口からは、過去の自分を責めるような言葉が何度も出た。

大牧さんでなければ書き残せなかったことが、徳山村史や何冊もの著書となって結実した。かつてあった徳山村の人々の営みが、そこには息づいている。そのことに感謝したい。(山)